

---

## 校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

---

### 共感性を育てる

まわりの様子や心情をおもんばかることなく相手を傷つけてしまう子ども、こういった子に培わなければならない力はまさしく「共感性」だと感じています。世の中には共感性豊かな人はたくさんいます。共感性の高い人は他人の思いを自分のことのように感じることでできる人です。他人の喜びや幸せを共有できる人です。それは、他人の悲しみや痛みを想像し共有できるということでもあります。そのため、共感性の高い人は他人の物を盗ったり傷つけたり差別したりということのできにくい人だと言えます。物を失った人の悲しみや傷ついた人の痛みを自分のことのように感じ、それを想像することができるからです。

他人を傷つけたりすることを避けようという心の働きは、傷ついた人の痛みや怒りやその家族の悲しみが想像でき、さらにそれを感じる自分の心の痛みやそのことを知った自分の周囲の人々の悲しみまでを、経験的に感じるところからくるものです。それを感じることでできない人には、「人を傷つけたら、やり返されるよ」「人を傷つけたら、罪になるよ」という脅しや法律で、行動を束縛していくことが必要になります。しかし、脅しや法律だけで束縛しているならば、「誰にも見つからない」と本人が思い込んだときの歯止めにはなりません。「別に法律に違反しているわけではない」という開き直りも出てきます。

それでは、子どもの共感性はどのようにすれば育つのでしょうか。共感性というのは観察学習によって身に付くものだと言われています。自分の身近な人が共感性を持って生活している姿を見て、それを自分の行動の中に取り入れるのです。その中でも、二つの側面があります。

一つは、身近な人が自分に共感してくれているという経験です。乳児の頃、不快で泣いていればそれを理解して快適な状態にしてくれたという信頼感の芽生えから始まり、幼児の頃に十分に言葉で伝え切れない自分の気持ちを受けとめ理解してくれたという体験、そして成長に従い様々な形でぶつかる問題や悩みでつらい思いをしている自分の痛みを理解してもらえたという満足、それらが積み重なって子どもの中に共感性を育てていきます。自分自身が子どもに対して共感性を持って接しているかどうか、自分でふりかえてみるのは難しいものです。それをふりかえる一つのヒントとして、次のような場面を考えて下さい。「小学4年生の子どもが河原の岩の上をピョンピョン飛んでいます。岩がグラグラしていて危ない感じなので、『危ないからやめときなさい』と声をかけます。それでもやめないで、もう一度声をかけたら『平気、平気』と言って飛び続けています。心配で見ていたらやっぱり岩から滑って落ちました。だから言ってるのにも思いながら、そばに走りよってみると、膝をすりむいて血が少し流れ泣きべそをかいています。」このときあなたは、まず、何と声をかけますか。心配だから、『大丈夫？』と言うに決まっている」と思う人は、共感性をもって子どもに接していることと思います。言うことを聞かなかったことに腹を立てながら「だからやめときなさいと言ったでしょ」と、まずしかる人は、子どもに対しての共感的なかわりをもう少し意識してみるほうがいいかもしれません。

子どもの共感性を育てるために必要なもう一つは、身近な人が小さな生き物の命を慈しみ、隣近所の不幸に心を痛み、テレビなどで知る遠方の地の災害などに対しても悲しみと同情を持つ姿を見せていることです。これらの姿を子どもは文字通り「見習う」のです。身近な人が小さな生き物や動物の命をどう扱うのか、「命」「金銭」「その他の欲望」のいずれに比重を置くのか、また他人の不幸にまず好奇心をもつのか同情心を抱くのか、それらについての身近な人の姿を、子どもは自分の行動の中に取り入れていきます。今、その子に関わっている大人にできることは何か。その子を成長させるためにできることは何か。私たちも上記のようなことを意識して子どもにかかわっていくことは大切なことだと思います。